

「総合的な学習」で集めたマークを寄贈

栃木県真岡市立亀山小と愛知県稲沢市立稲沢西小

3月下旬、ベルマーク財団に二つの小学校から寄贈マークが届きました。いずれも総合的な学習の一環として、学年単位で子どもたちが取り組んだものです。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため臨時休校となったなか、子どもたちの思いの詰まったベルマークが、先生たちの手によって届けられました。



栃木県の真岡市立亀山小学校（池田範夫校長、児童261人）からは、会社別にビニール袋で小分けされたベルマークが届きました。同封の手紙には「災害などで困っている学校に役立ててもらいたいと考えてこの活動を行いました……4年生児童一同」とありました。

2019年度の4年生37人は総合的な学習の時間で福祉を学び、「自分たちにできるボランティア」に取り組む中、ベルマークを集めたグループがありました。担当の鈴木大貴先生と亀倉和晃先生によれば、図書室の本やインターネットで調べてベルマークにたどりついたそうです。グループは全校児童にマーク収集を呼びかけ、1月に回収。2月中旬から、4年生全員で仕分け作業にとりかかりました。ところが学校は3月2日から休校に。で

も鈴木先生は「マークは責任を持って送ります」と子どもたちに伝えたそうです。手紙は亀倉先生が子どもたちに代わって書きました。



愛知県の稲沢市立稲沢西小学校（澤田豊喜校長、児童610人）からは、会社別に封筒に小分けされたマークが届きました。手紙には「社会で困っている人達の手助けができないかと考え、2月の1カ月間、ベルマーク集めを行いました……5年生一同」とありました。

2019年度の5年生は、総合的な学習の時間で福祉の学習をし、3学期は「わたしたちにできること」をテーマに、学年全体でベルマーク収集にチャレンジしました。動画「未来を育むベルマーク」を全員で視聴し、各教室にダンボールの回収箱を置くなどしてマーク収集を呼びかけました。

マークは子どもたち自身が仕分け・集計をする予定でしたが、その矢先の3月2日から休校になり、作業は先生方が引き継ぎました。瀬尾佳史先生は「子どもたちは福祉に関わることへの実感が持てたのでは」と話します。マークの合計点数は4910.7点でした。



④亀山小の子どもたちが仕分けたマーク
⑤稲沢西小から届いた会社番号ごとに分けられたマークと集計表

ボランティアの一環としてベルマーク収集

熊本県立宇土中から寄贈マーク

4月上旬、ベルマーク財団に熊本県立宇土中学校（森田淳士校長、生徒240人）から寄贈マークが届きました。生徒のボランティア推進委員会が主体となって集めました。マークをまとめる作業途中の3月、新型コロナウイルス感染拡大防止のため学校が臨時休校になりましたが、まとめた分のマークが先生の手によって届けられました。

宇土中は、県立宇土高校との併設型中高一貫校として2009年に開校。各学年で年2回宿泊体験を実施し、特に3年生は無人島で2泊3日の「サバイバル生活体験」をするのが特徴です。

ボランティア推進委員会は各クラス2～4人の委員で構成され、書き損じはがき集め、赤い羽根やユニセフへの募金などを行っています。自校の買いものためではなく、ボランティアの一環としてベルマークを集めていて、5年前にも財団に寄贈しました。集めた点数を競う全校

のクラスマッチも実施しているそうです。

2019年度も米田悠真委員長が全校集会でベルマーク収集を呼びかけ、委員たちも周知活動を展開。各クラスにある回収箱からマークを集めました。財団に届いたマークは、委員たちの手でテープに貼って会社別などにまとめられていました。

今回マークを財団に送ったのは、長く委員会の担当を務めた河野年美先生でした。「まだ周りから支えられている生徒にとって、何かの形で社会に貢献できることはうれしいことだと思います」と話します。

先生を通して米田委員長の感想を聞くと「マークの仕分け作業は大変でしたが、みんなで分担してやることができました」。改めてマークが色々なところで活用されていると知り、コツコツと集めればたくさんになることに驚いたとのこと。米田委員長は今春、進学先の宇土高でもボランティア推進委員会に入ったそうです。



⑥昨年6月、全校集会でマークの収集を呼びかける米田悠真さん（左から2番目）
⑦宇土中から届けられたマーク

東日本大震災の支援校から感謝メッセージ

福島県・久之浜第二小、宮城県・鹿又小、入谷小

ベルマーク財団が2019年度に実施した東日本大震災被災校支援の対象校から、感謝メッセージが届きました。まとめて紹介します。



福島県いわき市の市立久之浜第二小学校（片寄敦校長、児童21人）からは3月中旬、感謝のメッセージとサイネリアの鉢植えが届きました。同小は毎年のように財団にサイネリアを送ってきてくれます。校舎内で苗から育て、子どもたち

が世話をしてきたそうで、届いた鉢植えはきれいなピンクの花が咲いていました。全校児童の笑顔の写真と「いつもぼくたちのことを見守ってくださりありがとうございます」というメッセージが添えられていました。

宮城県石巻市の市立鹿又小学校（相沢進校長、児童283人）からは、子どもたちの様子を伝える写真入りのメッセージが届きました。本の読み聞かせ、運動



会、田植え、音楽集会、持久走大会……。学校生活の様々な行事で、生き生きと活動している子どもたちの姿が収められています。今回の支援では30メートルの綱引きロープなどを購入したそうです。

宮城県南三陸町立入谷小学校（高橋有校長、児童66人）からは、3年生が書いてくれた手書きのメッセージと写真を貼った画用紙が贈られてきました。今回の支援で、らいとどっじボール6個と50型液晶テレビ、ディスプレイスタンドを購入しました。子どもたちの学校生活の

充実役に役立っているといえます。震災で大きな被害を受けた南三陸町では、子どもたちにも大きな影響が残っており、同小では児童の「心のケア」に継続的に取り組んでいるそうです。「ハード面での復興は進んでも、ソフト面の復興は難しい。心は見えませんが」と高橋校長。



久之浜第二小のサイネリアは、財団事務所で長く花を咲かせ続けました。新型コロナウイルス禍で業務休止中も、留守番の職員が水をやりたり、自宅に持ち帰って風に当てたりと世話。その甲斐あって、5月の業務再開後も職員や来客の目を楽しませてくれました。

